鳩ヶ谷市文化財保護委員会・鳩ヶ谷市教育委員会
生涯学習課文化財保護係　編
『鳩ヶ谷市の歴史～旧鳩ヶ谷宿の町並み変遷～』
鳩ヶ谷市教育委員会　2008年３月　66頁

本書は，毎年発行されている『鳩ヶ谷市の歴史』のなかの一冊であり，「旧鳩ヶ谷宿の町並み変遷」として歴史学と建築学の視点から，近年変化が著しい鳩ヶ谷の町並みの様子を専門的に研究した成果を編集したものである。

埼玉県鳩ヶ谷市は，周囲の多くを川口市に囲まれ，日光御成道における江戸から二番目の宿場町であった旧鳩ヶ谷宿を中心に，狭小な市域が形成されている。旧鳩ヶ谷宿地域（旧宿場地区）の坂下町・本町・桜町には，平成13（2001）年の埼玉高速鉄道の開通以降，高層マンションが続々と建設され，数年間でその姿が大きく変化した。本書は，大きく変わりゆく町並みの過去と現在の記録であるとともに，文化資産としての町並みの再評価と，歴史的環境を尊重した都市開発に資するとの意図をもつものとなっている。

本書は，旧鳩ヶ谷宿に関する３編の報告によって構成されている。まず，巻田英人による「鳩谷郷と鎌倉街道中道」は，中世，鎌倉時代における鎌倉街道中道（奥大道）の鳩ヶ谷市域内における経路について検討し，鳩谷（鳩井）氏や鳩谷郷との関わりを考察したものである。

中世鳩谷郷の中心域や鳩谷氏の館については，鳩谷の名称にある「谷」の意味を重視する視点から，郷の中心域を台地上に比定する論考（『鳩ヶ谷市史』）や，鎌倉街道中道に沿って鳩谷氏の館が存在したという想定（『川口市史』）があった。しかし，同市中央部の自然堤防上に位置する三ツ和遺跡を対象とする発掘調査の成果から，これらの論拠に疑問を呈し，ステータスシンボルとしての意義を持つ磁器や東海地方（渥美・常滑・瀬戸・美濃）の陶器類が多数出土した同遺跡一帯に，鳩谷郷を所領とする御家人の館や富裕層の居住する町屋があった可能性が高いと考えている。また，鎌倉街道中道には，川口市元郷から同遺跡付近を通過して台地上に至る枝道の存在を想定する。

加藤信明による「日光御成道と鳩ヶ谷」は，〈御成りの道〉〈伝馬宿鳩ヶ谷〉〈助郷の村々〉というキーワードにより，近世における鳩ヶ谷宿の歩みを辿ったものである。

このうち，〈伝馬宿鳩ヶ谷〉では，元禄期作成の「御宮地絵図」（本町氷川神社蔵）と元禄８（1695）年検地帳を用いた復原により，家屋敷が御成道沿いのみにみられ，鳩ヶ谷が典型的な伝馬宿の形態であったことを指摘する。さらに，検地帳にみる土地の所持状態から，元々の鳩ヶ谷住民に加えて，近辺に位置する辻村・里村の住民の移住により新宿が成立したとみるが，その論拠となる土地所持状態が具体的に示されていないのは残念である。絵図に示された人名と検地帳名請人との一致がみられることも指摘しているのであるから，今後はこれを用いた近世鳩ヶ谷宿の形成過程についての詳細な復原作業とその成果の披露が望まれるところである。

あわせて，近世後期における問屋・本陣・脇本陣や役屋の構成，定助郷に指定された村々の分布など，近世鳩ヶ谷区宿を多面的に理解するための手がかりも提供されている。

黒津高行による「資料編　近代以降の鳩ヶ谷の町並み」は，各種の地図や空中写真，古写真や商店街マップといった多様な資料を比較検討することにより，町並みの変遷を辿るとともに，伝統的建築（町家）の残存状況および近年消失した町家を，その形態を示す写真を交えて紹介している。

ここで紹介されている資料をいくつかあげてみると，明治末期の町並みの様相を示す「鳩ヶ谷町地積図」には，旧日光御成道に間口を開く短冊状の地割りがみられることが確認される。あわせて，文化３（1806）年の「五街道分間延絵図」に，道路の両側に穿つ水路と町家の間に帯状の空間があり，ここに「市場杭」を打っていたことが示される。帯状の空間は，昭和８（1933）年頃撮影の空中写真でも確認でき，鳩ヶ谷ではこれを「いちにわ（市庭）」と称し，三・八の日にこの空間に商人を招いて市を開いていた。現在でも一部にその名残が見られる。こうした市庭の存在から，明治期の鳩ヶ谷の町並みが，少なくとも江戸後期以来の宿場の骨格を残し，その景観が継承されていたことを指摘する。

昭和８年頃撮影の空中写真には，関東大震災後に実施された耕地整理が，旧宿場周辺における景観変化の促進要因となり，その後の都市の骨格を決定づけたことがあらわれている。また，戦後の

空中写真には，当該地域においても都市化が進行したことが明瞭にあらわれる一方で，旧宿場の町並みの基本的骨格は維持され続けたことも判明する。

これに対して，平成15（2003）年の「鳩ヶ谷全図」には，鳩ヶ谷駅新設とこれにともなう駅周辺の整備や道路の新設・拡幅が確認でき，これらが旧宿場の町並みに大きな影響を与えたことを指摘する。近世に由来する短冊状地割を複数統合することにより，旧宿場の中心地域に高層建築が進出してきたのはまさにこの時期からであり，土地区画の形状とともに町並みのスカイラインに決定的な変化をもたらした。

さらに，平成19（2007）年に開催された市制施行40周年記念文化財展示会「鳩ヶ谷 町並みの今昔 －明治・大正・昭和・平成－」にて紹介した組写真の一部を提示し，町並みの特徴と変遷を外観するとともに，町並みを特徴づけてきた旧日光御成道に面する伝統的建築の旧態や現状を，平面図や写真などを交えて提示している。ここで改めて，平成10年代に多くの町屋が消失したことが具体的に確認されるとともに，明治から昭和にかけての各時代における商家建築の姿とその特徴を把握できるものとなっている。

以上，本書に収録された３編の内容をかいつまんで紹介してきた。これらはいずれも，鳩ヶ谷市域を走る主要交通路と地域との関わりについて記述したものであり，その通時的な把握に資するものとなっている。ただし，各報告間の関連性は考慮されておらず，個別的な記述に止まっている。とりわけ，近代以降の町並みの前提となる，近世における宿場町の様相を，絵図や検地帳を活用して具体的に提示する作業が本書に加わることにより，近代以降の町並みの特徴がより明確になるとともに，他の宿場町との共通性と鳩ヶ谷宿の独自性に関する考察へと発展する可能性もあっただけに，その欠如は大いに惜しまれる点であり，今後の課題となりうるものであろう。

しかし，その速度や程度は違えど，埼玉県下におけるかつての市町の多くで，鳩ヶ谷と同様の変化を見出すことができる。しかし，失われつつある町並みの記録と変化の実態把握が十分に行われないまま，事態が進行している事例も多いのではないかと思われる。本書は，急激な変化の断面を切り取った記録として貴重であり，今日におけるその必要性を改めて示す役割を果たしている。

なお，残念ながら本書は既に残部がない状態とのことであり，埼玉県立図書館，鳩ヶ谷市ならびにその周辺の図書館での閲覧をお願いしたい。

（田中達也）